

句構造論の存続適性を分ける分水嶺

— 補語を保護するか / 反故にするか、
それが問題だ —

田 原 薫

0. はじめに

本論考は試論であり、存続適性というのは 'sustainability'、すなわち反論や批判に対して、句構造論がそれらに耐えて生き残れるような条件を考察することである。なぜ今それが問われねばならないか、たとえば、チョムスキー流の変形生成文法が衰退して以来、句構造文法一般に対する疲労感・不信感・怨念のようなものが旧信者たちを中心に横溢し、もう句構造をいじっていても駄目なのだ、世間も注目してくれず、学問的貢献もできない、という諦めが近年急速に広まっているだろうからである。確かにそれは尤もな認識であるが、英語のような言語の理解と分析のためには句構造というシステムを全く無視することはできないので、変形生成流に代わる句構造論の資格の追求が待たれるわけである。

内容としては、チョムスキー流の句構造説で1つの述語＝典型的には他動詞があれば、それにまず結合する項「補語」があって、その組合せで末端（或いは始端）構造が作られ、それに指定辞が結合したりしてより大きな構造へと発展して行くが、そのような典型的な構造が他の述語の場合にもモデルとして適切かどうか、の検証と、その否定である。

論考の各節のテーマは動詞句から前置詞句へと順次力点を移し、次のようである。

1. 「補語」の特権を否定すること。すべての項を何らかの指定辞にする提案。
2. 前置詞の格付与（格認可）システム — 保証する述語AGz(とAGo)の必要性和、前置詞「補語？」の二重の θ 役割（独・露・羅など）と格付与。AGzの句内外仲介機能。
3. 主述型のPP (pendant la nuit, during the war など)、with+NEXUS 構造など。
4. 叙述主辞の前置詞句も θ 述語から出発する必要性。

1. 「補語」は θ 役割を保証される特権的な地位であってはならない

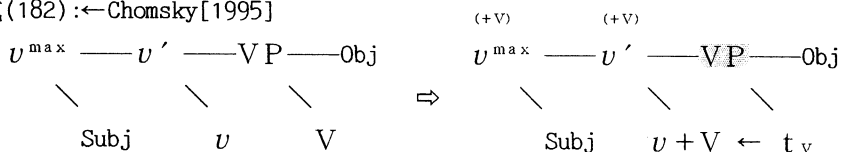
ここでいう「補語」 'Complement' というのは伝統的な（学校）英文法でいう「主格補語」や「目的補語」という意味ではない。変形文法ではおもに動詞が文構築上必須成分として要求する（名詞句）項のうち、最初に、つまり動詞がまだ投射していない V^0 の段階で結合する相手を「補語」と呼んでいるが、そうして出来た V' が「指定辞」 'Specifier' と呼ばれる第2の必須補充成分と結合して V'' となる。Chomsky [1986]の「障壁理論」では

この第2段階で投射が完結した動詞句VPになると宣言され、以後ほぼ10年はこの立場が続いたが、Chomsky [1995]の第4章C&T理論ではまた立場を変えている。この後者については別の論稿で書評を發表するので参照されたい。

さて注意すべきは、これらの理論で相対的に受動的な θ 役割をもつ項のまさにその θ 役割が、動詞の最初の項であるという特権的な地位によって保証される、とされていることである。もちろん「目的語」とか対格という格の問題は、どの文法理論でも必要のように θ 役割とは区別されている。受動的な θ 役割をもつ項が常に対格の目的語になると限らないことは、難易文 He is easy to arrest. や too...to構文 He is too clever to arrest. の存在から見ても納得できよう。これらの文で he は他動詞 arrest から受動者としての θ 役割を与えられるが、もし同時に対格を付与されれば arrest の後ろに固定されてしまい、難易文の場合のように摘出されて文主語になるとか、too...to構文の場合のように無音化されつつ（形容詞主辞）主節の主語と同一指示になることが説明できなくなる。だから θ 役割を付与或いは確認する機構は格の問題とは別でなければならない。

C&T理論では他動詞という語彙項目の形成にまで遡って、その2つの項の θ 役割の根拠を説明しようと試みている。それは次のような図式である。

※図式(182): ←Chomsky[1995]



これらの図で、Vは1項動詞、恐らく受動的ないわゆる'unaccusative verb'であり、ObjはVの唯一項であるから受動的な θ 役割を付与される。次のuは factitiveな意味をもつ「軽動詞」であって、Subjは1つの補文と1つの項をもつ動詞uの指定辞であるから、uの意味からして能動的な θ 役割を保証される、という。そして、 θ 役割が決まってからVがuに編入され、 $u + V = Vb$ すなわち他動詞が形成される、という仮説である。

しかし、左の図式(182)でわかるようにObjは、Subjの主辞であるuとは別の動詞Vの項であり、uの「補語」或いは目的語といえばVP全体である。だから左図から持ち越したVP節点は右図でも消すことができない。uを左図のV=右図の t_v の位置まで「繰り下げ編入」できればObjは複合動詞V+uの「補語」ということになるだろうが、[1995]の体系では「繰り下げ編入」は禁制とされているので、彼の θ 役割理論は破綻している。

これに対して田原の修正図式を見よう。断っておくが、これは田原本来の主張ではない。本来の主張がSOOTH2というシステムであることは何度も『ニダバ』既刊号で明言しているが、ここで言うのはあくまでChomsky[1995](182)図式の救済案である。その救済案の骨子は、SubjとVPの地位を逆転させて前者をuの「補語」、後者をuの指定辞とすることである。すなわち他動詞の意味論的主辞であるuから構築を始めることでもある。

図1

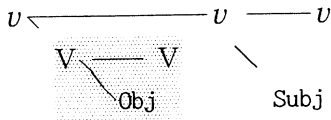


図2

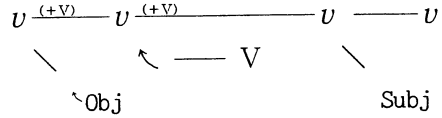


図1はvやVの投射のレベルが無視されたいわゆるbare phrase structure 図式であるが、Subjは項NPであり、Vの最大投射は述語句であって質的に異なった成分であるから、どちらを先にvと合併しても意味論的変動はなく、Subjは依然vの動作主である。

図1からゼロレベルのVが上位のv^(max)に編入されれば、もはやVは投射することができず、その唯一項であるObjは複合動詞v+Vの直属の項すなわち指定辞になるしかない。こうして図2ができるが、これはSOOTH 2の前身たるSOOTH 1すなわち「目的語指定辞起源説」と殆ど同一と言ってよい。Lexiconの中には軽動詞vというものではなく、v+Vでゼロレベルの他動詞になるのであるから、語彙論的にはvは最初からv+V=Vbの内包の一つにすぎない。そのvという内包がSubjという項を取るのである。こう考えるとチョムスキー図式よりSOOTH 1の方が正しい路線に乗っているとえよう。

参考までに図3は他動詞句のSOOTH 1図式、図4はそのSOOTH 2図式である。

図3 [構築方向: ⇒]

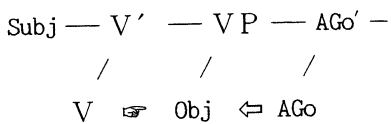
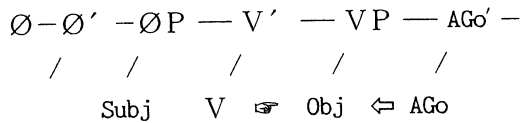


図4 [構築方向: ⇒]



これらの図は左から右へ構築が進むように書いた。図4のØは叙述性格を決めるゼロ述語、Subjは無標的な主語候補であるが、Objは目的語候補であると同時にその位置のまま対格を帯びた目的語にもなれるように設計されている。その際AGoという資格述語が活躍することは、既発表のいくつかの論文で述べた。つまりVとAGoの共同作業「挟み統率」(⇔)によってObjに対格が認可される。【だからVPまでの構築段階では対格をもつ目的語は作れないことが含意される。これが難易文やtoo...to構文の基礎となる】

なお指摘すべきは、図3は他動詞にしか適用できないが、図4は自動詞にも適用できることである。まずVが「踊る」のような'unergative'自動詞の場合はObjが欠けている。そして「壊れる」のような'unaccusative'の場合はSubjが欠けてObjが残っており、AGoが格認可に際して不活性(inert)になる。この場合文主語に進出するのはObjである。

以上の論議から、目的語候補のθ役割確保のために最初に動詞と結合する「補語」という特権的地位を認める、チョムスキーの立場はviableでもsustainableでもないことがわかりであろう。「補語」は保護すべきでなく、まさに反故にしなければならないものである。そして主語候補は「外項」なのではなく、実はVの「内々項」なのである。

2. 前置詞の格認可を保証する述語AGzの必要性と、その外部要素との仲介機能

Chomsky[1995]が出版され、いろいろ問題点が指摘されて草の根の不信感が広まりつつあった1996年においても、熱心な信者の学者などによって Minimalist Program の研修会や講習会が開かれていたが、1996年夏のそんな講習会で私は講師に質問してみた。「他動詞句でのθ役割付与や格認可に関するチョムスキーの主張はわかったが、前置詞句でのθ役割付与や格認可はどうするのか」という趣旨である。講師の答は「前置詞が付与する格は文法格ではなく構造格なので、前置詞からその「補語」である名詞句に直接付与され、AgrOやAgrSのような成分は必要としない」ということであった。

しかし、英語やロマンス諸語ではそれでよくても、ドイツ語・ロシア語・ラテン語・ギリシャ語ではそれでは困るのである。たとえばドイツ語で in という前置詞は、ある範囲を超えた移動のない「…の中で」「…の中に(存在)」を意味する場合は与格NPを要求し、到達点「…の中へ」を意味する場合には対格NPを要求する。たとえば in dem Haus と in das Haus の対立である。このような「格支配」の現象はいわゆるPPが外部に対して「閉じられて」いないことを表わす。独・露・羅・希を通じて、到達点を表わすPPでは対格が使われるが、この対格は共通祖語時代の「向格?」'allative'の残影を留めていて、それだけで直接文成分の役割を演じ、前置詞は副詞として「…へ」の意味を詳細に修飾する機能を果たした。だから独・露のような近代語にあっても、少なくとも前置詞の「目的語」を外部の要素(おもに移動動詞)の「統率力」の及ばない「補語」の地位でなく、外部の影響を受け易い指定辞の地位に置き、その上に(AGoのような)θ役割を保証する資格述語を掛けて、Vと資格述語との「挟み統率」によって外部要素の要求するθ役割を保証しなければならない。私はPPにまず掛かる述語を'AGz'と記すことにした。

図5 (Oblは斜格NP(候補))

図6

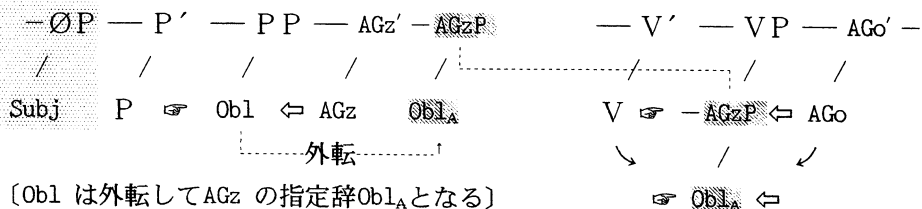


図5で、網掛けをした∅P部分は主語を伴う述語の中心をなすPPに対して必要になるものであるが、当面は必要ない。ここでのAGzは資格述語であって「基準参照点」というθ役割をチェックする。Pとの「挟み統率」でOblに認可する格は広義の所格である。

次に図6で、ここでのVはgoやcomeのような移動の自動詞である【移動の他動詞は情報分割など複雑な操作を必要とするので、今回は述べない】。このVの指定辞として図5で形成されたAGzPが入ってくる。資格述語AGoが認可する格は「着点格」である。VとAGoの統率力はAGzPの指定辞Ob1Aにも及び、挟み統率によって「着点格」を認可する。

3. 主述構造(NEXUS)型のPPと with NEXUS 型の句

英語には *during the war* とか、フランス語には *pendant la nuit* とかいう表現がある。現在では *during/pendant* は前置詞ということになっていて、だからこれらはPPとして扱われるのであるが、これらは自動詞を「述語」とする(現在)分詞構文に由来するものであることが明らかである。つまり「戦争が続いている」「夜が続いている」という意味から「戦争中」「夜の間」という意味になった。だから最初は主語→動詞の語順の方が優勢であり、現在分詞はむしろ「後置詞」だったのであるが、前置詞句に同化されて次第に現在分詞が前置詞のように感じられてきて、現在使われる句の形になった。フランス語では一致現象も辞めている【cf. *la nuit pendante* (まだ明けない夜)】。

これらの句の中では分詞起源の前置詞は「目的語(もとは主語)」の *the war/la nuit* に対して(何かの資格述語と組んで)基準参照点などの θ 役割を付与するものではない。従ってこのPPは上に掛かるAGzなどの θ /格チェッカーがなく、内部で何かの格を自給することができず、単に主語・述語の間に「同格」の予約がなされているだけであって、文全体と切り放されれば格がない状態に留まるであろう。第一、これらの句は文法上の必須項ではなく修飾語・状況語である。だからその格は文意全体から供給される。

ラテン語には「独立従格句」というのがある。*me puero*「私が少年であった頃」(E. *as I was a boy/ I being a boy,...*); *gladiis dstrictis*, *in eos impetum fecerunt*. 「剣が抜かれると(=剣を抜くと)、彼ら(敵)に向かって彼ら(我が軍)は突撃をした」(*swords released=releasing swords*)。例の前者は *ego (sum) puer*「私は少年だ」というNEXUS [Jespersenの言い方。現代では'Small Clause'か]の各語が従格【ablative: 奪格ともいうが、今の場合は「…から」の意味はないから「従格」の方がよい】に変わった形であるが、述語には形容詞や分詞が使われることが多い。例の后者は「完了受動分詞」〔近代語の過去分詞に相当する〕による構文で、*dstrictis* は *destringere*「解き(抜き)放つ」の完了受動分詞の複数従格形、*gladiis* は *gladius*「剣」の複数従格形である。これは男性名詞であるが、名詞・分詞とも複数従格では3つのgenderを通じて共通な-*is*の語尾を取っているので、必要なgenderの一致現象が表面に表われない。

下線部分を能動形式〔主語と現在能動分詞を使う〕で言うことも文法的には許されるが、それを採用すれば *eis dstringentibus gladios* (*they releasing swords*)となって対格の目的語を必要とし、複雑になるので嫌われ、あまり使われなかった。

これらの構文には近代語の前置詞のように格付与の源泉となるような語句がない。だからこのNEXUSの従格は文意全体が要求する「意味格」であり、構造格でも文法格でもない。この独立従格構文が、少なくともラテン語の娘言語であるフランス語の *pendant la nuit* の構文の起源またはモデルになったことは否定できないであろう。英語 *during* の *dure* もフランス語起源である。或いは古英語にも類似の構文があったかもしれない。ともあれ、「挟み統率」によって格を保証するにしても、そんな格の源泉は抽象的な成分である。

英語では with NEXUS の構文がある。with his hand in the pocket とか with all conditions considered, 「あらゆる条件(状況)を考慮すると、」などであるが、これはラテン語の独立従格句に極めて近い。後者のように受動型の分詞構文を能動的な意味にも使うことも似ている。とすればこの with は英語における「従格」つまり「状況格」を標示するマーカーということになるが、with がある以上、その相棒のAGz があり、「状況格」は両成分の「挟み統率」によってNEXUS に認可され、格を担える成分(NPと分詞・形容詞)に分配される、と考えるのが自然である。格認可後、NEXUS は情報分割され、「主語」を顕在化させた方の情報分枝は with とAGz とに挟まれたもとの位置に残るが、「述部」つまり伝統文法でいう真の「補語」=[*pro* [in the pocket]]/[*pro* considered]の方は外転されてAGz の指定辞の位置へ収容される、と考えるのがよい。分割されたNEXUS の直接構成素は同格でなければならないが、「状況格」は形式的には「斜格」である。

4. 叙述文の主辞としての前置詞句とその「主語」

先ほどの with his hand in the pocket はNEXUSを含むのであるが、それを独立文の形で言えば His hand is in the pocket. となる。copulaを時制子に付属する助動詞と見る立場からは、この文の叙述の主体は in the pocket だと言えるが、変形流にこの資格を単にPと見てはならない。the pocket の θ 役割(基準参照点)を確認し、格(斜格)を認可するために上にAGz が掛かるので、少なくともAGz'か、望ましくはAGzPである。そして被叙述項或いは主語である his hand はPの登場に先立つ \emptyset Pの段階でその指定辞の位置に発生するのである。2. 節の図5を回顧されたい。その図に当てはめれば his hand がSubjに当たり、Pが in、Objが the pocket である。外転などはなくAGzPの指定辞は空白、そしてAGzPにT(+be)が掛かり、さらにAGs が掛かって節文構築が進んで行く。

以上で、予定した句構造理論のrenaissance の指針を大まかに示すことができた。今後句構造理論に取り組まれる方は、少なくとも本稿の趣旨を理解して頂きたいのである。

参考文献

- ☆Chomsky, N. [1995] *The Minimalist Program*. The MIT Press.
- ☆田原 薫(1996) 『ニダバ』25号 「SOOTHと「挟み統率」から開ける展望」
- ☆田原 薫(1997) 『ニダバ』26号 「ゼロ述語から出発する句構造文法」
- ☆田原 薫(1998) 『ニダバ』27号 「主語初頭生起説から見た英語の完了構文」
- ☆田原 薫(1999) 『ニダバ』28号 「英語の中間構文を支える句構造」
- ☆田原 薫(2003) 『ニダバ』32号 「新句構造文法と補文Wh痕跡問題など」
- ☆田原 薫(2004) 『ニダバ』33号 「英語学のための句構造説最終決着版」
- ☆田原 薫(2005) 『ニダバ』34号 「「カリスマつまみ食い」論文作法の戒め」
- ☆田原 薫(2007) 『ニダバ』36号[辭]Chomsky, N. [1995] *The Minimalist Program*.